

# 浜中町霧多布湿原周辺の昆布干場におけるエゾシカの進入状況の把握及び 電気柵からの進入防止対策方法の開発

梅田 実里 (野生動物学)

## 【目的】

浜中町霧多布湿原(以下, 湿原)周辺の昆布干場(以下, 干場)にエゾシカ(*Cervus nippon yesoensis*, 以下, シカ)が進入し漁業被害が出ている。湿原には電気柵が設置されており湿原植生の保全と干場への進入を防止しているが(図 1), 地元産業の繁忙期に維持・管理が間に合わず電気柵の効果が低下し一部のシカの進入が常態化していた。そこで本研究では, 浜中町霧多布湿原周辺の市街地におけるシカの進入状況を明らかにするとともに, 琵琶瀬地区を対象地とし電気柵の効果及び進入が常態化したシカに対する進入防止対策方法の評価を行うことを目的とした。

## 【手法】

湿原周辺においてライトセンサス調査とルートセンサス調査, カメラトラップ調査を行い, 市街地へのシカの進入状況と電気柵の有無による観察頭数と撮影頻度の比較を行った。電気柵では月 1 回の電気柵点検とカメラトラップ調査を行い, シカの主な通過地点の特定と撮影頻度, 進入方向・方法を観察した。また電気柵以外からの進入経路を 2022 年 5 月から河川や道路, 山に自動撮影カメラを設置し観察した。さらに電気柵点検で特定した通過地点に 5 種類の通過防止対策実験(以下, 実験)を設置した。実験方法は, ①4 段の電気柵にワイヤーを追加し 7 段にする(以下, 横線)②電線の間に斜線のワイヤーを追加(以下, 斜線)③既存の電気柵の手前に 1 本ワイヤーを設置(以下, 二重)④電気柵の手前と奥にワイヤーを 1 本追加(以下, 三重)⑤電気柵の 5 段目にロープを追加(以下, 五段), の 5 種類とした。この実験は自動撮影カメラによる撮影頻度と行動観察, 点検時の通過した痕跡(破損, くぐり抜けた痕跡)記録を用いて対策の効果を評価した(図 1)。

## 【結果】

2019~2022 年の各季節でのシカの発見頭数に差が見られなかった( $p>0.05$ )ため年中多くのシカが湿原周辺を利用していたことが分かった。電気柵が設置された地域と未設置の地域では, 設置された地域でのシカの観察頭数と撮影頻度が低かったため市街地全体の電気柵の効果が出ていた( $p<0.05$ )。琵琶瀬地区の電気柵周辺では 1~3 月に撮影頻度が増加し(図 2), 進入回数も増加していた(図 3)。この時期は越冬による移動と狩猟によりシカが湿原に移動し, 撮影頻度と電気柵からの進入が増加したと推測された。シカによる電気柵からの進入方向は, 湿原から市街地が 55%。市街地から湿原が 45%とほぼ同じ割合だった。さらに進入方法は, 湿原から市街地はくぐり抜けが 100%, 市街地から湿原が飛び越え 20%。くぐり抜け 80%と進入方法は主にくぐり抜けを行っていたことが分かった。電気柵の補修・点検後, 計 7 か所の進入地点と各地点での進入方法を特定した。実験設置後の効果はくぐり抜け防止対策の斜線と横線でくぐり抜けの頻度及び, 飛び越え防止対策の三重と五段の飛び越え率が昨年と比較し減少していたことから効果が出ていたと考えられた(図 4, 5)。今後琵琶瀬と電気柵がに設置された他の地域においても, 今回侵入防止効果が確認された 4 つの実験方法の設置及び電気柵の効果の調査を行っていく必要があると考えられた。

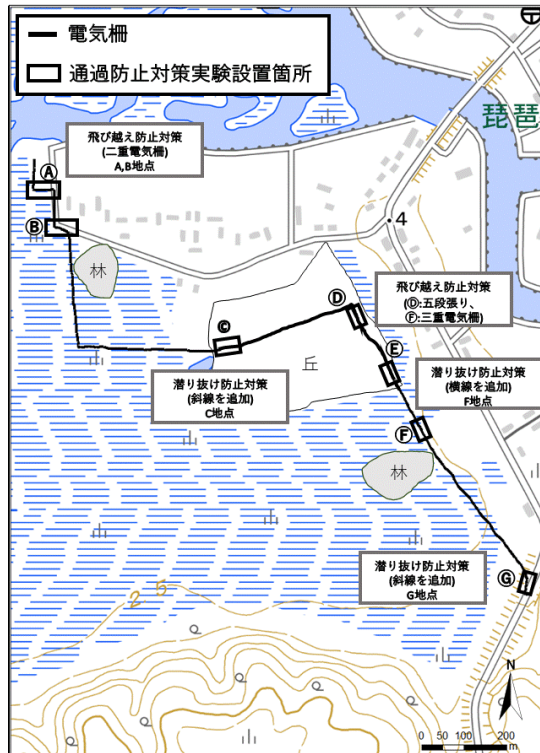


図 1. 通過防止対策実験設置箇所と 5 種類の通過防止対策実験のモデル図

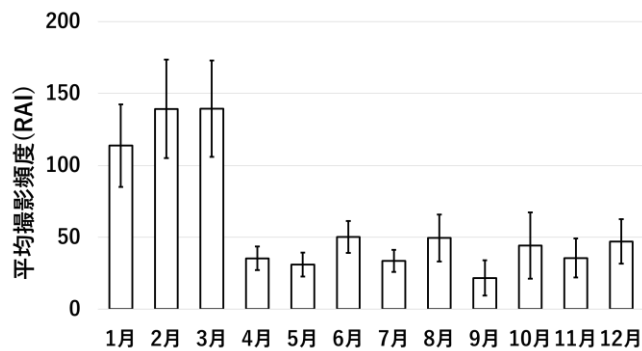


図 2. 電気柵周辺の月別撮影頻度 (RAI)

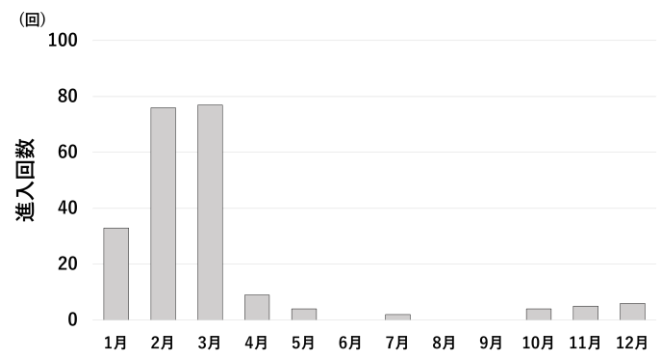


図 3. 電気柵からの月別侵入回

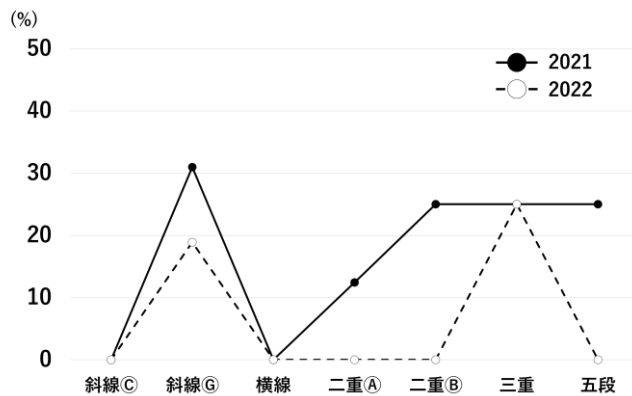


図 4. 電気柵からのくぐり抜けの頻度

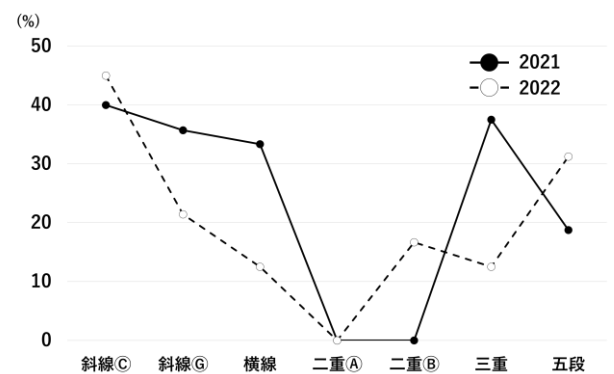


図 5. 電気柵からの飛び越え率